

# インターネット・ライブラリーの時代を迎えて

ハイパーテキスト情報空間のもつ2つの可能性

電  
子  
図  
書  
館  
論

歌田明弘  
UTADA Akihiro



ICCホームページのトップページ(<http://www.ntticc.or.jp/>)

## 1

「電子図書館」という言葉は、現在、一般的なものになりつつあるが、その呼び名にときにひっかかるものを感じるのは私だけだろうか。インターネットのようなオープンなコンピュータ・ネットワークに接続し、誰にもその全貌を把握できないままに刻々と変化していくアーカイヴズの場合は、たとえ「図書館」という名が付いていたとしても、それはもはや別の何かなのではなからうか。

図書館という名には、所蔵されているものが分類され管理されているというイメージがつきまとう。収蔵物もおおむね読みやすいように(たとえば製本された本という形に)テキストを加工されている。本という形態は、目次や帯、裏表紙の要約、あとがきなど内容をわかりやすく知らせてくれる装置を備え、ともすればばらばらになって世界のどこへとも散らばっていきかねないデータをじつに扱いやすく変形してくれている。

デジタル化されたテキストを相手にする時代を迎えてふと気づくのは、われわれの前にある情報群は、しばしば粗野で、制御することも、また読みとることもかぎりがなくむずかしい生のデータだということだ。

断片化されたネット上のデータは、それだけを読

んでも意味のないことが多い。ほかのデータと組み合わせて読むことではじめて意味をもつ。それは、ハイパーテキスト構造を持った文書群の特徴と言っているかもしれない。読み手は、さまざまなテキストに相互の関連を見出し横断していくことが求められるのだ[★1]。

そうしたテキスト群を相手にするとき、従来の「管理」「分類」といった概念が意味をもたなくなっていることに気づく。

皮肉なことに、ネットワークに接続されたアーカイヴズが独自のインターフェイスをもち、その完成度が高くなればなるほど、ネットワークの他の部分から切り離されていき、ときに使いにくいものになりさえする。検索などもどんなに優れていても、独自なものならばネットの他の部分との連続性がなくなる。ネットの汎用的な検索ではヒットしないということも起こるし、ネットワークごとの利用方法を覚えなければならなくなるという弊害も出てくる。できるだけネットワークの他の部分と地続きにして(乱暴に言えば妙に手を加えず並べるだけにして)、ネットワークの汎用的な検索システムに任せておくほうがいいということも言えるのではなからうか。

たとえば、インターネット上にある「WWW  
ヴァーチャル・ライブラリー  
仮想図書館」[★2]という「図書館」を見てみれば

そのことはよくわかる。これは、WWW(ワールド・ワイド・ウェブ)を生み出したバーナーズ・リーとCERN(ヨーロッパ素粒子物理学研究所)が1991年以来ネット上で組織化している「図書館」である。インターネットに勝手気ままに散らばっている無数の情報群を手間をかけずに利用しやすくするにはどうしたらいいか、WWWを生み出した人物はやはりよく理解していたように思われる。「図書館」と名乗っているものの、ボランティアによって運営されているこの「図書館」は、「アポロジニー研究」から始まってアルファベット順に、170ほどのジャンルに分かれたサイト・リストができていただけである。すでにあるサイトをもとに、ジャンル分けしたサイト・リストを作る——リンクを張っただけだから当然ながらコンテンツの統一性は何もない。しかし、ばらばらの内容の「入口」をつくるだけで、巨大な図書館が出現してしまう。

こうしたことが可能なのは、言うまでもなく膨大なデータが英語圏ですでに存在しているからだ。インターネットというこの奇妙な「図書館」は、これまでの図書館のもっていた「整理」や「分類」といった管理能力を高めることよりも、乱暴なやり方であれ、とにかくデータの「数」を増やすことが、その有効性を高める絶対的な方法であるかのように見える。

## 2

よく知られるように、テッド・ネルソンは、ハイパーテキストを用いた「ザナドゥ」という巨大な出版<sup>デポジットリ</sup>収蔵庫のアイデアを早くから提案していた。この出版収蔵庫にアクセスする者は、リンクをたどって多様なテキストを横断して必要なデータを見つけだすとともに、自分の仕事を「出<sup>パブリッシュ</sup>版」することができる。このアイデアは、実際、WWWの誕生に影響を与えたようだし、テッド・ネルソンの立場から言えば、現在のWWWは、彼のアイデアを換骨奪胎したものだということになるだろう。そのテッド・ネルソンは「分類」や「階層」についてこう言っている。

——幼い頃から、私は分類や階層に疑問を抱いていた。それはいつも魅力的で興味深かった。もつとらしく見えるものも多かった。けれども私は本能的に、世間一般にある分類が単純化の行き過ぎであることや、階層構造が記述する世界にごまかしが潜んでいることを感じていた。

(……)

分類や階層の形而上学的な価値(そんなものが存在するとしたら)を否定しているのではない。分類や階層を信じないことが(情報システム構築のための優れた方向)を暗示しているのだ[★3]。

ハイパーテキストというコンセプトは、こう語るテッド・ネルソンによって名を与えられ育て上げられたものだが、そのハイパーテキスト構造をもったWWWが、「分類や階層」といった従来の図書館になじみ深い概念をときに超えた存在であろうとしているということはきわめて示唆的だ。テキストを<sup>シーケンシヤル</sup>順序だった構造にしても、読むさいに、書かれていることの論理関係を検証するために、読み手はテキストを解体し組み立てなおしているとテッド・ネルソンは考える。彼には、それがあまりに無駄で「不必要」だと感じられた。そうした疑問を抱いた彼は、リニアな構造を要求しないテキスト、ハイパーテキストのコンセプトに到りついたのだった。

ところで、「ザナドゥ」からWWWになる過程で、何がどう変わったのかということは真剣に考えてみるに値することだろう。プランを現実化するというのは、当初胚胎していた広大な可能性のいくつかを犠牲にするということでもある。当初のプランニングにさかのぼることによって、現在のWWWのありようが必ずしも絶対的なものではなく、さらにそれを超えたものが生まれる余地があるかもしれないということ(少なくとも理論的には)理解できるからだ。

テッド・ネルソンは、「ザナドゥ」では、利用された度合いに応じて著作権料を受け取ることができると言っているが、現在のWWWには、「ザナドゥ」の中心的コンセプトだったこの著作権料システムがない。そのことはすぐ見てとれるが、さらに、著作権料システムに比べるとテッド・ネルソン自身あまり強調しなかったコンセプトがもうひとつ抜け落ちている。それは、「オリジナルのテキストにさかのぼる」という発想である。

——たとえば、この科学者[遺伝学者]は自分の考えを発展させるために、ダーウィンをもひとく。彼女は他の書物——聖書、SF小説など——からひらめきを得る。これらが結び付きながら彼女の思考が発展していく。

この科学者は論文を書く時、自分が読んだものをそのなかで参照する(このリンクは明示されている)。彼女の論文に示された原典に興味を覚えた読者は、参照を理解するためにリンクをたどって原典を読む。

こうして、ことは進んでいく。私たち西洋の文化的伝統は、暗黙的または明示的なリンクでたがいに結ばれた著作物がもたらした偉大な所産である。

原則として、著作物は——引用というかたちでも、オリジナルのかたちでも——いつでも入手できる(傍点は引用者) [★4]。

WWWにかぎらず、デジタル出版物は改変が容易で、ふと気づくと出所不明の怪しげな文書で満ちあふれている、ということになかねない。そうした危惧がある以上、「引用」したときに著作権料が発生するのみならず、強制的にリンクが残り、原典に戻って確かめることのできるシステムというのは貴重である。しかし、「ザナドゥ」からWWWにいたる過程で、こうした可能性は消えていった。

### 3

ハイパーテキストは、テッド・ネルソンが名を与える以前に、ヴァネヴァー・ブッシュという人物が1945年に発表したエッセイ「私たちが考えるように」のなかにその萌芽がみられる概念として知られている。とはいえ、ブッシュの独創だったというわけではない。ブッシュのエッセイをさかのぼることさらに半世紀、つまり今世紀が始まるころに同じようなことを考えていた人物がいた。ベルギーの書誌学者ポール・オトレである。彼は、前世紀末に、「国際書誌局(International Office of Bibliography)」などの組織を作っている。そのオトレは次のように言っている。

——読むものが多すぎる。そんなことにかまける時代じゃない。世の中はもはや個人の思考の迷宮にやみくもにつき従うことに甘んじはしない。自分のために概説したくせに他人に読むように押しつけても無駄なのだ [★5]。

何やら耳が痛いような主張だが、こうした思いのある部分はヴァネヴァー・ブッシュにも共通のものだ。

彼も、「出版が、われわれが利用しうる能力をはるかに超えたものになっているのは困ったことだ」と書いており、出版物が大量に出回ったために、大事な研究が埋もれて利用されない状況を憂えていた。そのことが、彼にハイパーテキスト・マシンのアイデアの重要性を認識させることになった [★6]。

ブッシュは事実上エッセイを書いただけだったが、オトレのほうは、一冊の本からデータを抜き取るというドン・キホーテ的な作業を始めることになる。本の中身をカードに抽出し、それをメルヴィル・ドゥエイの十進分類を改変した分類法(国際十進分類法の最初のヴァージョン)にしたがって仕分けし始めた。この恐るべき人物は、それを、テキストだけでなく、画像の領域——つまり今日の用語で言えばマルチメディア——でやろうとした。もちろんコンピュータでなく、カードで……。

彼は、まず書誌の分野でそれを始めている。1895年に彼の奇妙な友人2人が40万個の見出し語を集めて「万能書誌庫(Universal Bibliographic Repertory)」というデータベースのサンプルをこしらえている(データベースのカードの数は、その後、なんと1564万6346にまでなったという)。

1906年には、彼は、画像データに挑戦し始める。やはり独自の十進分類にしたがいカードに書き留めた「万能図像庫(Universal Iconographic Repertory)」である。カードは1912年までに25万件になり、「万能書誌庫」の画像部門となった。

彼は書誌に飽きたらず、1907年には、フルテキストのデータベースづくりに突入する。「百科文書庫(Encyclopedic Repertory of Dossiers)」と名付けたテキスト本体に関するデータベースは、1914年までに、100万項目にまでなったという。

このオトレは、本というものの問題点を次のように指摘している。

- a) 本は、科学的なデータのいくつかとそれにともなう科学知識の一部だけを提示する(本の不完全さ)。
- b) 本は、正しい知識と同様、誤りも提示する(本の誤謬)。
- c) 本は同じことを何度も提示する(繰り返し)。
- d) 本はいろいろなところで述べられている情報をひとまとめに提示するのではなく、それを分

割し、無数の書物にばらまく(断片化と分散)。  
e) 本は、その重要性の度合いに応じて情報を提示するわけではない(重要なものと二義的なものの混合)[★7]。

「グーテンベルク時代」を生きるわれわれは、本というものをとかく絶対視しがちだが、彼の指摘には本という形態を突き放してみる視点があってもいい。

オトレにとって、知識や情報とは多義的でも曖昧なものでもなく、精髓だけ抜き取って語れるはずのものだという信念があったようだ。そういう彼の主張にしたがえば、本は丸ごと読む必要はないということになる。だから、一冊の本をばらばらにし必要なデータをカードに抜き取って、究極のデータベース、「普遍的な書物」といったものを作ろうと考える。

——この本には、知識のある分野に関するすべての事実について、体系的で完璧な形の最新の記述がなされている。その本は、関連出版物すべてのなかに散りばめられているデータや要素をまとめて関連づけることで成り立っている。事実の一覧や、思考のカタログ、体系や理論の目録を含んでいる。さまざまな科学データを、図表や地図、略図に凝縮してある。絵や版画、模写、記録写真などで解説している[★8]。

「究極の書物」というアイデアはけっして珍しいものではないが、関連づけを行なうことで万能のデータベースを作るという発想は、ブッシュのハイパーテキスト・マシン「メモックス」のアイデアときわめてよく似ている。「メモックス」もまた、項目のあいだに「道筋」<sup>トレール</sup>を付け、ユーザーはその「道筋」にしたがって巨大なデータベースの中を行き来することができる装置だった。

分類や階層性になじめなかったテッド・ネルソンと、「分類の鬼」と化したポール・オトレ、まったく相反する性向をもっていたこの二人がともにハイパーテキスト的構造に関心をもっていたという事実は興味深い。二人はまったく立場が異なるにもかかわらず、共通して従来の「本」に違和感を感じ、ハイパーテキストへとその関心を向けたのである。

ハイパーテキスト的構造というものを考えたとき、

分類に対する偏執とその回避という相反するこの二つの方向性は、じつはハイパーテキスト自体が抱える可能性を示している。

このことは、インターネットの検索ページのことを思い浮かべてみれば、容易に理解できる。つまり目的のデータに到達するには、YahooやNTTの検索ページに見られるように、ツリー状のルートをたどるディレクトリ方式と、階層性や分類を無視し単語ないしはフレーズでジャンプする検索エンジンを使う二つの方法があるということは、WWWにアクセスしたことがある者なら誰でも知っていることだろう。

いまとなつては何の不思議もないことのようにだが、そうした機能は、「本」という曖昧な形態のもつ可能性を突き詰めていったときに開けてくるものなのだ(さらに言えば、ディレクトリやフォルダといったコンセプトを使いつつ、一方で検索を行なってジャンプすることができるコンピュータの操作もこうした二面性を備えている)。

オトレの場合、先の引用に見るとおり、「本の曖昧さ」とは、「本」のもつ「非効率性」にほかならず、ハイパーテキストによって、「本」は、いわばエッセンスだけを抜き取ることが可能になるはずのものだった。

他方、テッド・ネルソンの立場から言えば、本は、無理にシーケンシャルな形にしなければならぬ無理難題を抱えているということになる。しかし、「リンク」というジャンプ機能を備えたハイパーテキスト構造の導入によって、そうしたリゴリズムは回避され、アマルガムな思考をアマルガムのままに提示することが可能になると考える。

「秩序」が導入できるだろうというポール・オトレと、「混沌」のままに提示することが可能になるというテッド・ネルソン——この二人がハイパーテキストによって開けると想定したテキストの世界は、180度異なっている。同一のものを通して思い描いたヴァイジョンのこの隔たりには驚かされるばかりである。

こうしてたどってくると、最初に私が述べた、「電子図書館」という呼び名に対する漠然とした違和感とは、じつはテッド・ネルソンの立場に立ったときのみ言えることなのかもしれない。オープンなネットワークに接続されデータ自身がアクセスした人(スタッフでもいいか)の手で改変されていく新しい「図書館」のもつ「管理不可能性」とは、テッド・ネルソンの発想に立ったときのみ言えるものなのだろう。

ただし、ハイパーテキストを導入することで、徹底

した秩序が導入されるはずだという考えのネックは、その秩序づけをいったい誰がどうやって行なうのかという点にある。オトレのカード化の作業の際も、誰がそのカード化を行なうのかということが問題だった。カード化を行なう者の能力と性向に、その結果が大きく左右されてしまうのである。

じつは、こうした問題は、ブッシュの「メメックス」構想にもひそんでいた。ブッシュは、次のように、リンクを張る専門職ができると言っている。

——トレル・プレーザー(道筋をつける先導役)という新しい職業が現われる。彼らは、膨大な公的記録を駆けめぐり有益な道筋をつけることに喜びを見いだす人々である[★9]。

単純な言葉の一致、もしくは既存のシソーラスに基づく検索といったものではなく、手作業で関連づけを行なうとなれば、その関連づけの仕事は高度な知識を要求され、専門的な作業にならざるをえない。専門職が生まれるというのは、裏を返せば、それがむずかしい仕事であるということにほかならない。

このことは、じつは現在のインターネットにも言えるのだ。単純な言葉の一致、もしくはシソーラスに基づく検索だけでは、なかなか役に立つ検索システムとはならない。ヒットする数が多すぎる、または役に立つ項目が検索されてこない、そうしたことは、インターネットで検索を行なった誰しもが感じることだ。その結果、点数等でサイトの評価を行なったり紹介文をつけたりと人為的な作業が必要になってくる。たとえプログラムを組んでそうした作業を(半)自動化しても、プログラミングという人為的作業の段階で、その作業をする人間のレベルが検索表示の有効性に反映することになる。オトレのカード化やブッシュの「トレル・プレーザー」が抱えるのと同種の問題が派生していると推測される。

こうして見てくると、日々巨大化し、いたるところに出現し始めたハイパーテキスト情報空間とは、もともと秩序と混沌の間で大きく揺れている存在であったし、おそらくいまもそうだろうということがわかる。

グーテンベルクの印刷術が生まれた当時の人々は、筆写本の思考からなかなか逃れることができなかつたと言われるが、グーテンベルク以来の大革命の時代を生きるわれわれもまた、従来の「本」の発想から抜け出ることができずにいる。しかし、従

来の「本」の世界を超えていくための通過点のひとつは、じつはこのあたりにあるのではないか。秩序と混沌の両方を志向するハイパーテキストのこの相反する特徴を意識化し突き詰めていくこと——そのことによって、テキストはグーテンベルク時代の「本」の制約から逃れ、よりいっそうはばたいていくことができるのではなからうか、そんな思いに駆られている。 ●

うただ あきひろ:1958年生まれ、エディター。詩誌『ユリイカ』の編集長を経て、現在はフリー。著書『マルチメディアの巨人』『デジタル・ライティングへの招待』など。

#### ■註

★1——アメリカや北欧の国々では教育の目的は、リニアな発想から逃れ、問題相互の関連を見出し、複数的で批判的な思考を行なうスタイルを身につけさせることにあり、ハイパーテキストはそのための格好の教育ツールだと、一群の学者は主張している(Cliff McKnight, Andrew Dillon and John Richardson, *Hypertext in Context*, Cambridge University Press, 1991, p.112)。インターネットは漫然と「サーフィン」していくことで何かが得られるように語られるが、ハイパーテキスト情報空間とは本来、読み手が明確な目的意識をもって関連性を見出し読みこんでいくことで初めて意味をもつものなのかもしれない。

★2——<http://www.w3.org/>

★3——テッド・ネルソン『リテラリーマシソン——ハイパーテキスト原論』(竹内郁雄・斉藤康己監訳、アスキー出版局、1994、p.88。

★4——同上、p.143。

★5——W. Boyd Rayward, "Visions of Xanadu: Paul Otlet (1868-1944) and Hypertext." *Journal of the American Society for Information Science* 45(4), 1994, p.240。

★6——ブッシュの生涯に関しては、拙著『マルチメディアの巨人』(ジャストシステム、1996)を、ブッシュがハイパーテキスト概念を思い至った過程については『デジタル・ワールドの創造——ヴァネヴァー・ブッシュと生命科学』(『20世紀のメディア 4』ジャストシステム、1997所収)を参照されたい。

★7——Rayward, op. cit. p.240。

★8——Rayward, op. cit. p.240。

★9——Vannevar Bush, "As We May Think," in James M. Nyce & Paul Kahn, eds., *From Memex to Hypertext: Vannevar Bush and the Mind's Machine*, Academic Press, 1991, p.105。ここでは拙訳によったが、いまや古典的な存在となったブッシュのこのエッセイの邦訳は、西垣通「思想としてのパソコン」(NTT出版、1997年)および★1の文献に載っている。

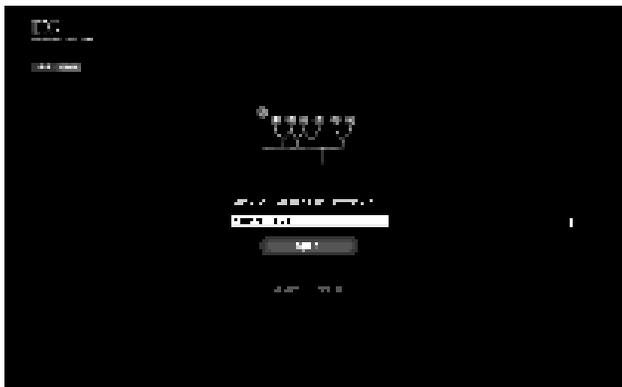
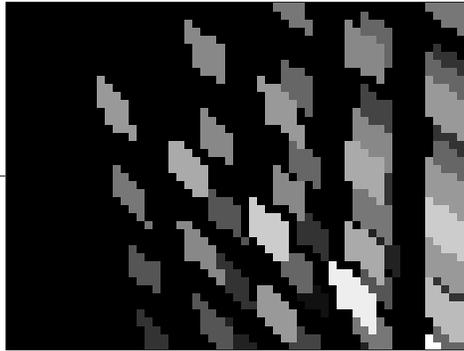
# 「ライヴ」と「アーカイヴ」のはざままで

ICC電子図書館の設計思想

電  
子  
図  
書  
館  
論

大和田龍夫

OWADA Tatsuo



「ライヴ」と「アーカイヴ」

ICC電子図書館は、館内では15台のウィンドウズ95マシン、そして館外からはインターネットを通じてアクセス可能な、情報ライブラリーの総称である。蓄積している情報は、大きく分けて「20世紀マトリクス」「アーティスト・データベース」「ICCホームページ」という3つのカテゴリーに分類することができる。

ICCのプロジェクトが始まった91年より、テーマ発掘、情報収集などの作業チームは発足した。また、94年にはその中間成果物として『テクノカルチャー・マトリクス』(NTT出版より刊行)「アーティスト・データベース working research version (Mac版)」、95年本誌13号にも「アーティスト・データベース working research version (Windows版)」の発表を行なった。また、ICCホームページは94年1月から構築に着手し、今日に至っている。

以下では、ICC電子図書館の全容、そして、個々のサービス・メニューの特徴を解説していくこととする。

ICC電子図書館の特徴は、インターネットに対して開かれた情報集積体であるということである。つまり、館内に蓄積された情報のほとんどはインターネットからもアクセスが可能である。すべての情報にアクセスが可能でない理由は、借用した図版の利用許可が館内に限定されているものがあること、

また、現段階では通信速度に限界があるため、情報サービスを館内に限定せざるをえない、ということによる。

サービス・イメージは次の通りとなっている。ユーザーはインターネット・ブラウザを利用してICCホームページにアクセスする。ユーザーはそのなかの利用したいメニューを選択する。画面の案内に従って要求をしていくと、エージェントはCCのデータベースに必要な検索式を投げかけ、そのデータベースからの回答をエージェントがHTMLに整形、ユーザーへ情報を提供することになる。

この基本的な情報提供方式は、「20世紀マトリクス」「アーティスト・データベース」とも同じである。また、データベース内に蓄積されたテキストの検索には全文検索エンジンを使用し、高

速かつ網羅的な情報検索を可能としている(現段階では、全文検索サービスは、「20世紀マトリクス」「アーティスト・データベース」のみである)。

館内での利用の場合には、VOD (Video On Demand) サービスを組み合わせた動画の閲覧も可能となっている。MPEG2により圧縮されたアート&サイエンスの現在を語った約30人のインタビュー、ICCのプレイヴェント活動の記録などを見ることも可能である。いずれのメニューも館内、館外での共通のインターフェイス、サービスを目的としてWWWブラウザによる閲覧という形式を実現している。

ICCでは、電子図書館という考えを独自に定義している。ICCが得意とするコンテンツは責任をもって制作・管理するが、それ以外については、イン

ターネットを通じて他の「図書館」に借りに行くという、ネットワークの特性を活かした方法論をとっている。したがって、ICC館内の電子図書館はインターネットに対して開かれた「開架図書」の形式をとっているのである。インターネットの資源を利用するだけというのは、あまりにも失礼なので、ICCでは自分たちの活動のアーカイブを公開すると同時に、ICCで行なってきた研究成果を「公開」することによって、インターネットの社会に参加するという意志表示を行なっているつもりである。ちなみに、来館者に「蔵書はどこですか?」と尋ねられることがままあるが、ICCでは公開している蔵書は一冊もないのである。

では、次に、電子図書館の各サービス・メニューの紹介を行なう。



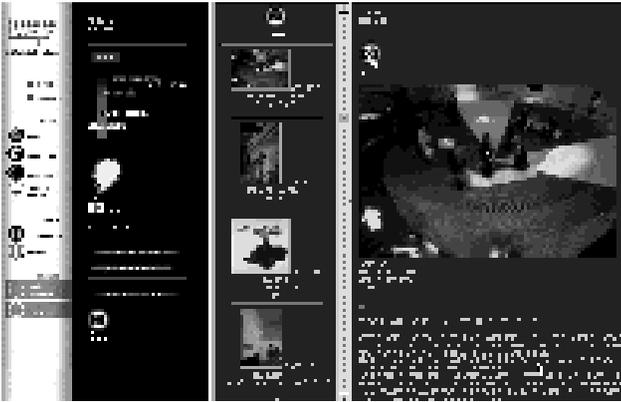
上——「20世紀マトリクス」のトップ画面  
上右——CUBEによるブラウザ  
下——インデックス



## 20世紀マトリクス

20世紀の芸術文化、科学技術に関する、テキスト、映像、写真をまったく新しいかたちでリンクさせたデータベース。年代、分野、地域の3つの軸をもつ立方体として世界を再構築し、任意の平面で切断することによってまったく新しい関係を参照できるシステムを提供している。91年より伊藤俊治氏を中心としたプロジェクト・チームが、テーマ開発、データ収集、インターフェイス研究に分かれ、開発を行ってきた。

サービス・メニューとしては、年表、ハイパーテキスト、画像データベース、CUBEによるブラウザ(キューブの形はマトリクスのイメージを最も具現化している)、データベース空間でのチャットなど多岐にわたる。閲覧しているデータはひとつ(ひとつのデータベースを参照している)であるが、閲覧するための手段としてユーザーのレベルに応じた多様なメニューを用意している。



「アーティスト・データベース」検索結果

## アーティスト・データベース

内外のメディア・アーティストのプロフィールなどを蓄積している。氏名、カテゴリー、作品などからアーティスト・カードを参照していくデータベースである(92年より森岡祥倫氏、ICC学芸員の白井雅人を中心にプロフィールの収集、インターフェイスの研究が進められた)。テキスト、写真、動画、プログラムなどを「20世紀マトリクス」同様データベースに格納し、さまざまな手段で閲覧できるようインターフェイスを開発している。全文検索エンジンも併用することで、アーティストのプロフィールなどの情報も検索することが可能になっている。



ICCホームページのメニュー

## ICCホームページ

ICCの活動の記録、広報活動のデータを蓄積している。過去の活動についての「記録」にとどまらず、ICC内で行なわれる活動を「ライブ中継」するなど、ネットワークそのものを「活動空間」としても利用している。館内からの利用に限定すれば、過去の活動について、VODシステムによって動画も見ることができる。将来、全文検索エンジンを利用した検索メニューも提供する予定である。ICCIはインタージャンルを標榜したミュージアム活動であるため、カテゴライズされたインデックスによる検索に対応することが困難である。全文検索エンジンの性能向上によってはじめて、ICCの過去の情報の探査が実現する。

最後に、今後の課題について述べていた。

今日まで、情報の蓄積の方法として最も優れた方法は、書籍という形式であった。が、書籍という形式をとった場合、情報の探索速度に問題があった。

コンピュータの登場によって、とりわけインデックス検索、全文検索という2つの方法を併用することで、情報探索は格段の進歩をみることができるようになった。しかし、書籍のもっていたもうひとつの重要な「情報」、すなわちデザインという概念が残念ながらまだコンピュータによる蓄積には十分に反映することができない。PDF (Portable Document Format) による蓄積など、さまざまな実験をICCでも取り組んでいくこととなる。そして、情報を扱う場合に、「ライブ」と「アーカイブ」、この2点の要素をいかに組み合わせ取り込むのが、重要な課題になると考えている。ネットワークは、「ライブ」「アーカイブ」の両面にすぐ

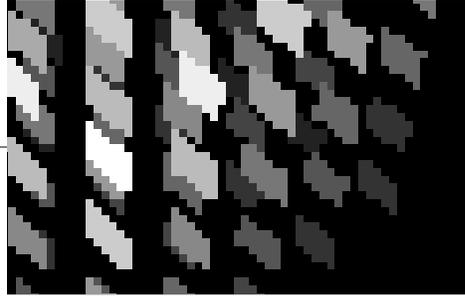
れていながら、現段階ではテレビ、書籍などのメディアに、専門性という意味でどちらにおいても「負けている」。今後、その「間」にあるメディアがどのようなかたちで社会へ影響を与えていくことができるのか、ネットワークをメディアとして取り扱う職業の一端に身を置くものとして、大いに関心のあるところである。

ICC電子図書館が今後もメディアの実験場としての機能を果たすことができれば幸いである。 \*

おおわだ たつお:ICCテクニカル・ディレクター。1964年生まれ。92年よりICCマトリクス、マトリクス研究会、電子図書館を担当。館内のネットワークシステム等のテクニカル・コーディネーターも任ず。95年、96年と実験的に運営していたBBS「ICNet」、96年「moppet映画ワークショップ」なども企画・担当。

## 自己消滅するデジタル・ライブラリー

電子図書館論

森岡祥倫  
MORIOKA Yoshitomo

ICCの電子図書館, なかでも「20世紀マトリクス」と「アーティスト・データベース」は, ライブラリーと銘打ってはいらぬものの, けっして専門家としてのライブラリアンやカタログガー, アーキヴィストが, 厳格な職能知にもとづいて編纂した権威的な資料体ではない。

このプロジェクトに参加した者のひとりとして, いささかの独断をもって述べさせてもらうなら, 分類規則の破綻や参照関係の恣意性, それらの変則的な事態をみずから誘発するものとしてこそ20世紀という時代精神の特質を認め, かつてマクルーハンが“文化変容のマトリクス”とか, 全体と部分, 形質と内容が交代し続ける“モザイク社会”と呼んだものを体現するような未知の情報環境に出会うこと, つまりはシステムそれじたいが20世紀を, そして現代を擬態しようとする欲望からすべてがはじまったと言えるだろう。

ここでは, このデジタル・データ化されたハイパーテキストや人物誌が, まだ電子図書館という呼称さえも得ていなかった初期の段階(おおむね1992-93年頃)において, どのような典型ないしは対抗典型をもとに構想されたかについて振り返ってみたい[★1]。

## 1. 分類学の不可能性から

コレクターの動機を問うということは, 収集品その

ものや収集方針が何事かの表現や代補たりえるかということとほぼ同義である。フロイトのギリシア/エジプト美術コレクションは, ユングのインド美術に対するフェティッシュは, かれらの思想の確立とその変転を象徴する存在たりえるのか? 例えばこのような問いを研究者に投げかけることは, さほど無謀な行為ではないだろうし[★2], 事実, そうした視点からヴァルター・ベンヤミンは, 『風俗の歴史』や『エロティック美術史』といった奇書によって知られる歴史家エドゥアルト・フックスの業績を, “唯物論的芸術考察”の先駆者として分析したのではなかったろうか。

ところで, フックスに勝るとも劣らぬ“相対的な道徳主義”(ベンヤミン)をもって, 明治, 大正, 昭和の世相を収集した日本のジャーナリストといえば, まずは宮武外骨をあげねばなるまい。外骨もまた, 数冊の評伝と『面白半分』や『滑稽新聞』の復刻によって, 近年ふたたび好事家の注目を集めている。けれども, 官憲の目をも恐れぬ寓意と風刺精神の羅如するこれらの雑誌や新聞の編集作業の背後に, 精力的な資料収集の活動があったことはあまり知られていない。東京大学の本郷キャンパスにあつて, 今も明治・大正期のジャーナリズム研究に欠くことのできない明治新聞雑誌文庫は, 外骨が責任者となった小さなライブラリーである。当時の中央図書

館長が、コレクションのあまりの雑種ぶり猥雑ぶりに受け入れを拒んだすえ、わけあって法学部の管轄となったこの建物には、外骨が全国を行脚して集めた膨大な数の新聞や雑誌、錦絵、人名目録などが所蔵されている。

なかでも数千枚にのぼる絵葉書コレクションはすばらしい。全体は、けっして美装とは言えない数十冊のアルバム帳に整理してあるのだが、驚くべきはその分類目である。たとえば“ひとりばっち”の表題で綴じられた巻からの一枚。京都の寺社をめぐる観光絵葉書からの一葉であろうか、よくよく見れば風景の中に芸者がひとり佇んで点景に収まっている。“部分と全体”“長いもの”“短いもの”……すべてがこの手の主観に満ちた分類法なのだ。高踏的な官学美学や書誌学では処しきれない無数の“グレイ・マテリアル灰色資料”との優雅な格闘から外骨が発見し、人々にしたり顔でプレゼンテーションするのは、自明の文化モチーフの背後に潜む無意識のモチーフの共有原理である。それはちょうど、ベンヤミンが映画の視覚的無意識について語ったような、“とっぴょうしもない技術”の使用によってはじめて気づかされる、ありえないけれどもひたすら知覚されるリアリティなのだ。

アート・アンド・テク=サイエンスという、旧くて新しい文化複合のフィールドから採取される一次データの大半は、外骨のコレクションにも似て、ファイン・アートの権威とは無関係な、また技術史や芸術史の線形的なヴィジョンともリヴ・ヴィジョンズとも相を同じくしないグレイ・ゾーンそのものである。伝統的な図書館学が十進分類法の手前で黙し、ドキュメンテーション運動が索引語の通則化を持って立ち止まる、まさしくこの分類学の不可能性にこそ、オーディオ=ヴィジュアルな、ハイパーテクスチュアルな電子図書館は収集の動機を求め、さらにその不可能性を伝達する術を發明しなくてはならない。

## 2. 上演するドキュメンテーション

図書館学の権威、ジェシー・シェラはある論文[★3]で、情報学に裏打ちされたドキュメンテーションと図書館学とのあいだの反駁の歴史を整理している。ラ・フォンテーヌとポール・オトレ[編集部註：オトレについては歌田明弘氏のテキストを参照]以降独自の道を歩みはじめたドキュメンテーションが、目録のマイクロフィルム化から画像や音声を含むコンピュータ化へという技術進化の過程で情報学との近密度を増

していくなか、19世紀はじめの公共図書館の出現以来、市民社会へのサービスを本義とする従来からの図書館学の目的と深い亀裂をつくっていった。シェラによれば、情報学者は図書館員を軽蔑し、ポルヘスが描写したようなモノとしての書物の濃密で存在論的な世界に住まう時代遅れのワーカーとしかみなさない。シェラがこの論文を発表したのは1968年であるが、およそ現在でも、ローカルの公共図書館の職員を教育・啓蒙する立場にあるのは、情報学の教養を身につけた文教政策の中核に近い中央のドキュメンタリストたちである。そもそも学者の研究支援を促す目的で主張されはじめたドキュメンテーション技術の目的と、ときには暇潰しや娯楽を含めた多様な需要に否応なくこたえなければならぬ公共図書館の実務とを、同相の問題として扱うことに無理がある。

しかし、美術や音楽の世界にあってはいささか状況が違う。敵対関係以前の状況にあると言えばよいのか、アート・ドキュメンテーションの推進者の多くは、世界的に見ても情報学やコンピュータ工学、あるいは博物館学やアカデミックな美術史学出身する人々で占められていて、まさしくモノそれじたいによって公衆へのサービスを行なっている美術館学芸員の関与する余地はさほど多くはない。それどころか奇妙なことに、ますますメディア・テクノロジーとの関係を色濃くする現代美術の領域にいる人間ほど、ドキュメンテーション技術への嫌悪を剥き出しにする場合が少なくないのだ。「今生まれつつあるアートの素性や傾向を、シソーラスや索引に還元することなどできはしない。ポール・ゲッティのAAT[★4]とやりにポリティカル・コレクネスは載っているのか」というような屈折した現場主義がまかり通る(とりわけこの国では)。少なくとも学芸員は、それが自分の仕事であるとは思っていない[★5]。

一方、ICCの電子図書館では、ビデオ・アートをはじめとする作品の“展示”とWWWリンクを含むさまざまな“参考資料”が混着していることからわかるように、利用者像を専門家か非専門家かといったような指標で切り分けてはいない。視点を変えて言えば、このサービス機能がコンピュータや通信ネットワークという“情報学的な装置”によって実現されているかぎりにおいて、それはドキュメンテーション(索引)・システムであるのだが、同時に観賞や読書といった実体性・上演性をも提供している。それは、アート・アンド・テク=サイエンスとかメディ

ア・アートという、関係性の接続と切斷の運動によってのみ生成する、ボーダーなき領域の特徴でもあるのだろう。

### 3. 生きられたデータ

美術史家のアンドレ・ジャステルの提案によって1960年代はじめに着手された“総目録”事業の延長として、ルーヴル美術館やポンピドゥー・センターなどフランス各地の美術館や博物館では、国家規模の芸術・文化資産の目録化が進行している[★6]。データの一部はすでにコンピュータ・ネットワークによってアクセス可能であるが、あくまでそれらの目録の目的は、登録された所蔵品＝出所を同定できる“モノの総覧”をつくることであって、それらを創作したアーティストのバイオグラフィを集成することではない。

これに対し、ICCの電子図書館では構想段階から、メディア・アーティストの電子版who's whoを作成することを目論んできた。現在稼働中のアーティスト・データベースがそれである。アート・アンド・テクノサイエンス関連の人名・組織ダイレクトリとして1992年以来2年おきにフランスで出版されている『IDEA』(アニック・ビューローの編集による)が、おそらく収録点数ではこの世界で最も充実した出版物であり、登録人数ではこれに遠く及ばないが、美術史家の利用するCD-ROM版を含めた各種の人名辞典とこのデータベースとの差異は、実のところ動画像や音声をインタラクティブに提供するマルチメディア形式にあるのではなく、まず第一に、データの登録者であり所有者であり利用者でもあるすべてのアーティストに向けて、つねにデータ更新の可能性が開かれている点にある。そして第二に、データベースそのものが、かれらの新たな活動の現場への通底口であるということ——インターネットによ

るオンライン公開という環境が十全に活かされるならば、両者の区別は意味をなさないだろうが、つまり、この二つの要件から定義し直すなら、古典情報学的な意味での“データベースではない”ということこそが、ICCのアーティスト・データベースの最大の特徴なのだ。それは生きられたデータである。

やがては保存や集約(他者の情報をストアし他者の行動に向けてアンカーすること)の依存対象となる領域(ベース)を放棄し、情報管理体としての自身の存在をも消し去ることこそが、アーティスト・データベースの、いやおそらくすべてのデジタル・ライブラリーの使命であり最終到達点であるのかもしれない。 \*

もりおか よしとも:1955年生まれ、造形作家、映像評論家、東京芸芸大学芸術学部映像学科助教授。著書=『メディア・レヴオリュション』(共著)、『うつしとられた身体』(共著)など。訳書=『映画理論集成』、マイケル・ゴールドバグ『マイケルさんのVIDEO IN & OUT』など。

#### ■註

★1——なお、「20世紀マトリクス」については、WWW版のフロント・ページに監修者である伊藤俊治氏のテキストがあるので参照願いたい。ここでふれる事柄の多くは、おもに「アーティスト・データベース」にかかわる省察であるが、電子化ライブラリーと呼ばれるシステム一般への言及であることを断っておく。

★2——例えば次の論文を見よ、Forrester, John, “‘Mille e tre’: Freud and Collecting,” in Elsner, John and Cardinal, Roger (eds.), *The Cultures of Collecting*, Reaktion Books, 1994.

★3——ジェシー・シェラ「図書館学、ドキュメンテーション、および情報学について」(初出1968年、村主朋英訳)、『情報学基本論文集』(上田修一編、勁草書房、1989)所収。

★4——『Art and Architecture Thesaurus』の略。ポール・ゲッティ・トラストの作品収集・研究部門が作成し、オックスフォード大学出版局が販売する建築と工芸と美術に関する情報検索のための大規模なシソーラス(類義語・反義語の目録)。1990年版は約4万7千の専門用語を収録。以降2年ごとに補遺が発行されている。

★5——美術専門図書館(室)を併設する場合でも、運営するのは司書またはそれに類する職務を任命された職員であって、学芸員はまったく関与しないのが普通である——むしろユーザーであることに甘んじている。

★6——この間の経緯については次の研究書に詳しい。西野嘉章『博物館学——フランスの文化と戦略』東京大学出版会、1995。



ICC電子図書館の案内画面